

学生による授業アンケートの 理論・手法・活用

報 告 者

大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター 教授）

福永 栄一（大阪成蹊大学現代経営情報学部 准教授）

小田 隆治（山形大学高等教育研究企画センター 教授）

コーディネーター

松本和一郎（龍谷大学理工学部 教授・大学教育センター長）

概 要

第1に、授業アンケートから何が読み取れて何が読み取れないかについて、理論面と、実践を通じた結果分析の面からご報告いただく。「学生による授業アンケート」については、未だに「意味が無い」という声もあるし、授業アンケートだけで教員の教育貢献度を測る大学もある。今一度、原点に返って考える。第2に、「学生による授業アンケート」の手法を考える。授業アンケートを紙ベースで行うことは、資源浪費・集計に手間取る・費用がかさむ、という3点で改善が望まれる。WEBによるアンケートは回収率の低下が課題となる。その点、携帯電話によるアンケートは回収率の低下を回避しつつ、上記の課題を克服できる手法である。第3に、「学生による授業アンケート」の教員組織としての活用の実践報告をいただく。授業アンケートの結果を個々の教員にフィードバックするところで終わってしまう大学が多い。多大なエネルギー・資金を注ぎこむ授業アンケートであるから、さらに「ファカルティによる活用」に繋げなければもったいない。午後はこの3つのテーマについて小グループに分かれて自由討議とその報告行う。

【第4分科会】

学生による授業アンケートの理論・手法・活用

参 加 者 数 48名

分科会報告者

第1報告者	大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター 教授）
第2報告者	福永 栄一（大阪成蹊大学現代経営情報学部 准教授）
第3報告者	小田 隆治（山形大学高等教育研究企画センター 教授）
コーディネーター	松本和一郎（龍谷大学理工学部 教授・大学教育センター長）

（1）分科会のねらい

学生による「授業評価」に関する研究会を開くと、必ず出る意見に「あんないい加減な学生による評価は評価に値しない。こんなけしからんものは即刻止めるべきだ」というものがあります。

学生による授業アンケートが多く在大学で取り入れられて10年はたつというのに、10年前と変わらない意見です。（龍谷大学では、この不毛な対立を避けるために、授業を改善するための「アンケート」であって「評価」ではない、として「授業アンケート」と名称を統一しています。）一方で、「授業アンケートを集計するだけ・個々教員に返却するだけでなく、もっと組織としての授業改善に役立たい」という動きも大きくなってきています。授業アンケートを行っている各大学内でも大学間でも、この授業アンケートに対する評価の乖離が大なり小なり存在すると思われます。そこで、第1の報告者・大塚先生に「授業アンケート」の理論と実践の両面から講演頂きました。

FD活動の明白な証拠として多くの大学が授業アンケートを実施する中、授業アンケートを廃止する大学もかなり出てきています。理由としては、1に人件費も含めて費用がかさむこと、2にその割には授業改善に本当に役立っているのか分からないこと、が挙げられています。次ページの、この分科会の出席者に対する事前アンケートの回答からも多くの大学が統一フォーマットの紙ベースでの調査を行っています。この方式では費用がかさむことのほかに紙資源の浪費という大問題も抱えています。そこで WEB によるアンケートを取り入れる大学も出てきていますが、回収率の低下が問題で



す。経費節約と統計処理の機動性から今注目されているのは、携帯電話による「うまいやり方」です。このシステムの紹介と利用実績の報告を第2の報告者・福永先生にお願いしました。

授業アンケートを廃止する大学が挙げるもう1つの理由「授業改善に本当に役立っているのか分からない」ことに対する報告として、山形大学での実践例の報告を第3の報告者・小田先生にお願いしました。「授業アンケート」の今からの課題は、アンケート結果の「組織としての活用」をいかに豊にするか、であろうと思います。

第4分科会参加しに対する事前アンケートの集計 (回答：学校単位：回答総数40) *分科会当日に到着したデータも含む				
A. 1年間の大学としての公式の授業アンケート回数 (2010年度から再開の2校を実施に含む)				
0回 2	1回 5	2回 30	4回 2	学部により、1または2回 1
B. 授業アンケートの方法(併用あり)				
紙 35	WEB 6	携帯電話 2		
C. 授業アンケート結果の利用法(複数回答可) (番号付きの選択肢はアンケート主催者が提示、番号無しは自由記述欄から採録)				
1. 個々の教員に返却				35
2. 集団として統計処理をして公開(学内のみ)				26
3. 集団として統計処理をして公開(学内・外)				8
アンケート結果の統計処理をするが公開しない				5
4. 学生へのフィードバックの制度がある				25
5. 授業アンケート結果に基づいて必要とみなされた教員への指導				6
6. 評判の良い授業から抽出した「お勧め事項」をまとめたものを教員に配布				2
7. アンケート結果の良い教員の表彰				2
アンケート結果の良い教員の授業参観				2
教員へもアンケートを取る				1
授業アンケート結果の説明会				1
個々教員が授業改善報告書を提出する				5
報告書を発刊				1

* 項目「C」の自由記述欄から採録した項目の回答数は、選択肢として提示した場合はもっと多い数になる可能性があります。

分科会の進行

午前中に3名の報告者から報告をいただきました。昼休みに入る前に質問用紙による質問を受け、午後の冒頭でそれらに対して報告者から回答して頂きました。併せて若干の討議を行いました。その後、7つのグループ（1グループ7名が原則）に分かれ、各グループで本日の報告の3課題のどれか（複数可）を決めて頂きました。各メンバーには所属校で使っているアンケート用紙の実物を持参して頂きそれをもとに実情報告をし、さらにグループが1つの大学だと想定して、未来につながる施策の検討をし、結果を報告して頂きました。なお、アンケート用紙は、グループ討議の後、差し障りのない大学はコーディネーターに提供して頂きました。

(2) 報告の概要

「授業アンケートの読み方・生かし方」（大塚氏）

大塚先生の講義において毎回取った授業アンケートのデータを基に毎回の教育現場の実践とアンケート項目の数値の相関について、および、工学部における記名式のアンケートによる4年間の成績も含めた追跡調査の分析について報告いただきました。

「携帯電話による授業アンケート」とその結果に関する一考察（福永氏）

携帯電話による授業アンケートといっても、情報の機密性や学生にとっての親近感など、工夫しなければならない点が多々あります。福永先生の開発したシステムは、教室においてアンケートを取る点は紙によるやり方と同じで、使う道具は携帯電話、というものです。フェイス・トゥ・フェイスを残しつつ、紙資源を無駄にせず・統計処理が自動的即時的になされ、したがって学生へのフィードバックも次週にはできます。さらに、出席調査や質問・感想の聴取などの応用も広い優れたものです。このシステムの概要と実践結果の分析を報告して頂きました。

学生による授業アンケートの活用（小田氏）

授業アンケートをしさえすれば授業が良くなるというものではなく、「授業を良くしたい」という意志の下に諸策を連携実施していく中で授業改善の成果が出てくる、「よそがやるからうちもやる」というような個々の実情を考慮しない施策だと弊害の方が多いであろうとの警告がありました。

(3) 報告に対する質疑並びに 全体討議の内容

質問用紙に基づく報告者からの回答を基に討議をしました。特に「学生による授業アンケートを記名式で行えばまじめな回答が増えるのではないか」というフロアからの意見に対して討議が盛り上がりました。記名式でアンケートを行っている大学からの発言も交えて、アンケートに混入する「不正直なアンケート回答」がやり方に依存してどの程度あるかが議論となりました。記名式には個人が特定されるという点で、逆に正直な意見表明が阻害されるという危惧も出ました。

大塚氏のまとめ

- ・ キャンペテリア方式にして、多くの質問項目の中から各教員が望む項目を選べるようにすることも良いのではないか。アメリカではテニアと密接に結びついているので、教員が自分に都合の良い項目のみを選ぶ傾向にあり、これはこれで良くない。
- ・ 授業アンケートを授業改善に結びつけることは容易ではない。

福永氏のまとめ

- ・ 携帯電話によるシステムを導入する場合の初期費用を心配する向きもあるが、研究会に出て頂ければ、共同研究と言うことで便宜を図ることも考えられる。まずは研究会に足を運んで貰いたい。

小田氏のまとめ

- ・ F Dを一般論では語りたくない。
- ・ 自大学にとってマイナスなものはしない。→ 何もしなくて良いのかを考える。
- ・ F Dに万能はない。
- ・ 個人の努力だけでは教育は良くならない。

(4) グループ討議の報告

(グループからの報告の原文を尊重しています。一部、意味不明の箇所を削除し、明らかな誤字は訂正しました。)

(第1グループ報告)

課題：「アンケート手法の改善」を中心として意義・結果の有効利用を考える

基本方針（基本的考え方）：

- ・ 各大学の状況に合わせた目標・目的設定が重要
- ・ 全学実施によって、カリキュラム構築における各科目の役割を考え捉え直すために現状把握することが大切

今後の方策と検証指標：

- ・ 現状に合わせて、常に目的・目標を確認する

- ・ 個人的改善と組織的改善の二本立てで考える

- ・ アンケートの意義について学内議論を深める

(学生には改めて周知すること、教員にはアンケート実施に関する意見聴取を不断に行うこと)

(第2グループ報告)

課題：アンケートの利用・結用法

基本方針（基本的考え方）：

各大学の状況の確認で大半の時間を使うことになった。最近数年実施していなかった大学、教員が任意の数科目を選んで実施する大学、全科目で実施する大学までさまざまであるが、実施目的（大学評価に対するデータ、授業改善のためetc）で、異なってくる。公表方法は、返却されたデータに対する事後アンケートでの所見を冊子や学内Webで学内公開が多い。

今後の方策と検証指標：

公開した結果がどのように活用されているかどのような効果が挙がっているかの検証(検証方法)が今後の課題。新しい活用方法の事例報告があった。

授業評価を学生の自己評価アンケートと変更、記名式に。授業ごとに集計結果を個々の教員に返却すると同時に学生ごとの結果を集計し学生個人にも返却。成績データと自己評価データを利用してアドバイザー教員が学生との面談を実施する予定。

(第3グループ報告)

課題：授業アンケートの方法

基本方針（基本的考え方）：

- (1) 手法を改善すればするほど、なぜやるかにいきつく。
- (2) 当たり前にするための手法。
- (3) お金の問題もあるが、第一は学生にとっていいものかどうかである。
- (4) 分野・講義・技術・項目が同じでよい。
- (5) アンケートが受け入れられやすいものになるためにはどうするか。

- (6) 自由記述の意味

今後の方策と検証指標：下記の番号は上記番号に対応

- (2) ・ P Cは回答率が低かった。携帯のほうが学生にとって楽。回収率は紙がよい。
- ・ 早い時期 --> 今の学生にフィードバックできる。(帝塚山大学の事例)
- ・ 終わりの時 --> シラバスと連動し、次に履修する学生にフィードバックする。

- (3) 学生にとって負担にならない形、項目数等。携帯は負担の少ない手段の一つである。(自由記述も答えやすい)(共立女子大)
- (4) アンケートを分けて実施する。紙・携帯等形式をわける。
- (5) 「授業評価アンケート」→「授業改善アンケート」とした。
- (6) 自由記述の意味は大きいが一つのコメントで、全部を把握はできない。

(第4グループ報告)

課題：授業アンケート結果の有効活用

基本方針（基本的考え方）：

1. 授業改善への活用であり、教員評価であってはならない。
2. 悪い評価項目についてはその要因分析して改善対策を絞る。

今後の方策と検証指標：

1. 授業研究の実施 -- アンケート（の）悪い評価項目の分析にもとづいた改善対策を協議する。
2. 他大学との交流 -- 他大学への見学または、他大学教員の授業参観

(第5グループ報告)

課題：各大学の授業アンケート実施の実情を聞き、自大学に生かしたい。

マナーに対する授業アンケートの有効利用について考えていきたい。

基本方針（基本的考え方）：各大学の実情について情報交換する中から、課題を明らかにしていく。

今後の方策と検証指標：

- (1) 実施の体制として 教員評価か授業改善かによって実施の体制が決まってくる。しかし、認証評価にそなえて、実施するという側面もある。
- (2) アンケート質問様式について 共通・個別の質問項目どちらもあるが、共通の質問項目に向かう傾向にある（両方を採用する場合もある）
- (3) アンケート結果の有効利用について 授業改善は当然のこととして、カリキュラムの改善へと結びつけることが必要なのではないか。

(第6グループ報告)

課題：授業評価アンケートの公表について

基本方針（基本的考え方）：

すべて公開している 2校

(冊子作成、CD 全教員に配布)

条件付きで公開している 4校

(講義名のみで、教員名は公開しない(学内のみ公開) 自由記述は個々へ)

現在検討中 1校

活用するには(授業評価アンケートをとる意味)

・アンケートをとるタイミング

*情報操作をすることも可能(結果)

*教育改善の最終手段として、効力がある。

*結果を保護者に年2回送る

*科目差がある。

*教員評価になってしまっている。→

あまり意味がない。

今後の方策と検証指標：

- ・アンケートに書いたことが、学生に返ってくるシステムが大切か?→公開する意味はあるのか。
- ・データとして残しておくことに意味がある。(文科省、第3者評価等)

(第7グループ報告)

課題：

(1) 授業形態(講義、小集団)別アンケート(用紙)の実現について

(2) 公開方法、アンケート結果の使い方について

(3) 自由記述の取り扱いについて

基本方針(基本的考え方)：下記の番号は上記番号に対応 決まらず→意見交換の場に(以下内容を記す)

(1) 別紙として設問の例を記したものを用意し、回答を求める方式で行っている実践の紹介

(2) アンケート結果の使い方及び、公開方法は不十分。アリバイづくりの状況。アンケート結果を見て、教員のコメントを記したフィードバックを行っている大学もある。

(3) マーク設問よりも有用なものである。アンケート結果の中でも楽しみにしている部分である。

今後の方策と検証指標：

話し合いで記す。授業改善にどう活かすか、検証も必要。

(4) まとめ

グループ討議は活発でしたが、グループによっては時間が足りなかったようです。参加者自身に考えて頂く、というねらいは達成できたと思います。コーディネータのまとめとして発言したのですが、「個々の教員が

自分の行っている授業改善の成果の指標として授業アンケートをどう活かすか、教員自身が考えて使わないとアンケートの有効利用にはならないでしょう。アンケート

を取るにより自動的に授業が良くなるものではありません。』ということを、本日の報告・討議を通じて痛感しました。



授業アンケートの読み方・活かし方

京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 大塚 雄作

第15回FDフォーラム・2010年3月7日(日)・同志社大学
第4分科会「学生による授業アンケートの理論・実践・応用」

授業アンケートの 読み方・活かし方

京都大学高等教育研究開発推進センター
大塚 雄作

■授業アンケートの読み方・活かし方

1. 毎回授業アンケートの挑戦
—— 評定を左右する多様な要因
2. 授業改善とは何か？
—— コミュニティという視点から
3. 組織としての特徴をどう伝えるか
—— 組織の平均値の意味するもの
4. ローカリティをいかに掴むか？
—— 部分集団の特徴を探る

1. 毎回授業アンケートの挑戦 —— 評定を左右する多様な要因



◆毎回授業アンケート

教育評価の基礎(Ⅰ) Portfolio 2006-6 (5月23日)

学生番号	氏 名	評定
(1) わかりやすかった	4	3
(2) 新たな発見があった	4	3
(3) 興味深かった	4	3
(4) 授業の構成は適切であった	4	3
(5) 有益であると思った	4	3
(6) 授業に集中できた	4	3
(7) 総合的に満足できた	4	3

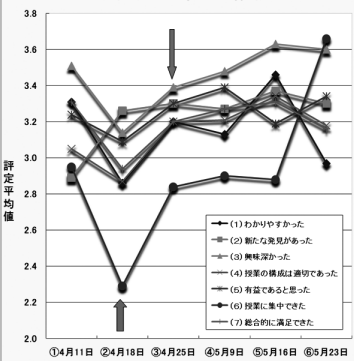
■今日の授業で、個人的に、ポイントと感じた点、疑問点、印象に残った点、授業で改善すべき点など、以下に自由に記載して下さい。(なお、必ず何れか記入して下さい)

【実践例】

②おとなしいが
すぐ寝る新入学生 →
↓
③たまたま パワー
ポイント導入 →
but 寝る学生は寝る

◇ 評定平均
... 4段階
◇ N=65~71

京都大学2006年度前期『教育評価の基礎Ⅰ』
評定平均値の推移



◆グループ討論導入(2006.5.23)



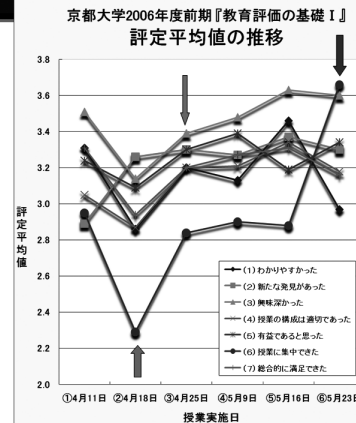
◆グループ討論の素材

【討論素材・・・『理念と現実』 by 1982.3.16 朝日新聞】

大阪府下の高槻市で、今月上旬、市立中学校の父母ら百余人がデモ行進をし、一万余人の署名簿を市教委に提出した。…（中略）…この中学校では、中間、期末の一斉テストが行われていない。通知票（点検票）も、優良可の三段階評価をやめて、「点検方式」をとっている。各教科の単元ごとに「指導目標に到達しているかどうか」を評価する方式である。……テストは、こどもに序列をつけるためではなく、どれだけ到達目標に接近してゆくかを見るために行うべきだと、この方式を推進する先生たちは考えている。……デモ行進をした父母らは、一斉テストがなければ、こどもの学習能力が落ちるし、こんな通知票では、こどもの学力が分からない、という。こうして、校区の住民も加わり、市教委に、①一斉テスト実施、②五段階評価の通知票作成、③一部教師団の責任追及と人事刷新、など七項目の要求を出したわけだ。……教育とは、こどもに競争、序列、差別の社会で勝ち抜け、とけしめることではない、とするのは「理念」である。その理念通りの教育方式では、こどもは受験レースで脱落する、というのは父母らの現実感である。……教師も親も、冷静さを取り戻して、理念を現実化し、現実に理念を吹き込む方法を模索しなければならない。

【実践例】

②おとなしいが
すぐ寝る新入学生
↓
③たまたま「パワー
ポイント導入」
but 寝る学生は寝る
↓
⑤思いつきで入れて
みたグループ討論

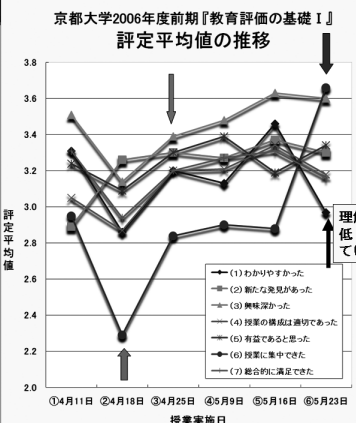


◆学生のグループ討論肯定的感想

このようなグループ・ディスカッションの機会は今まであまりなかったので新鮮であったと同時に、参加する皆が真剣に一つの課題に関して取り組めていたので、とても有意義であったと思う。自分一人では思いもよらないような意見が出て、またそれに対して自分が考えていることを補足していくと、かなり深い討論ができたと思うので、このような少人数のグループディスカッションの醍醐味を味わえたような気がする。……

【実践例】

②おとなしいが
すぐ寝る新入学生
↓
③たまたま「パワー
ポイント導入」
but 寝る学生は寝る
↓
⑤思いつきで入れて
みたグループ討論



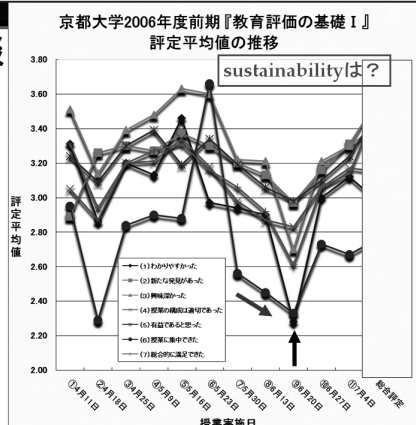
◆学生のグループ討論否定的感想

- ……それにしても90分で概要を説明し討論し発表するのは無茶だと思いました（提起しておいて何ですが）。……2週間ほど時間をとってしっかり議題を煮つめてからでないと到底有意義なディスカッションにはならない……
- 今回は各グループともに論点が絞れていないように感じた。それゆえにバラバラな提案になってしまったように思う。今回ならばこの議案をもとに「評価は相対的or 絶対的のどちらであるべきか」と限定した方が面白かったと思う。……

◇後日談

数学的内容（測定モデル・標準化等の統計的基礎）に入った途端に、集中度が再び漸減

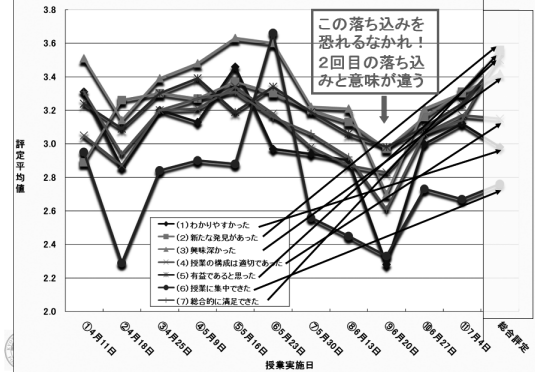
ついに、「理解度」も最低レベルに



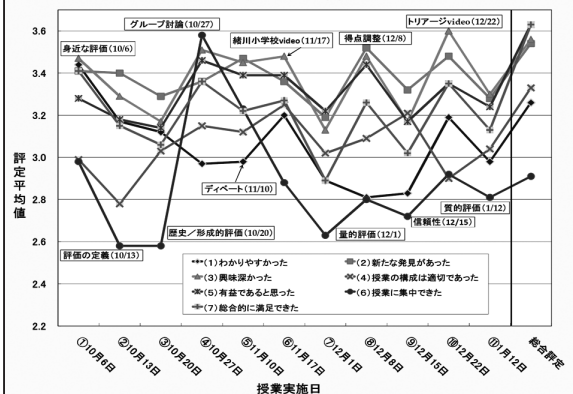
2. 授業改善とは何か？ —— コミュニティという視点から



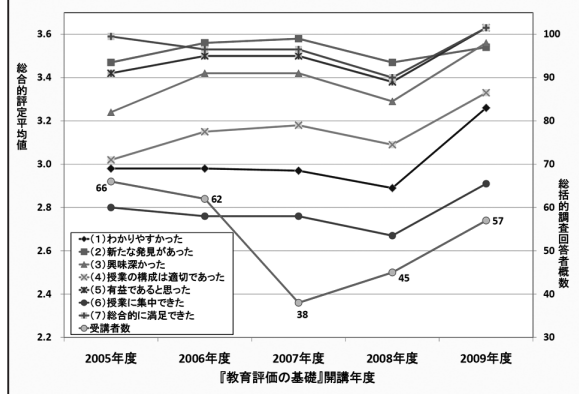
京都大学2006年度前期『教育評価の基礎Ⅰ』
評定平均値の推移



京都大学2009年度後期『教育評価の基礎』
評定平均値の推移



京都大学『教育評価の基礎』総括的評定平均値の年度推移



◆何が授業「改善」？

—— これがいいと思った瞬間が最も危ない！？

- ・「わかりやすさ」が低い
→ やさしくすればいいか？ **角を矯めて牛を殺す**
むしろ、演習・実習などの併用は？
- ・「授業への集中度」が低い
→ 集中度を高める工夫をすればいいか？
むしろ、事前の準備、今後の展開明示か？
- ★カリキュラムの視点からの改善の試みが肝要
＝ 授業は一人だけで改善できるものでない → 開放
さまざまな要素・視点からの交流
＝ 教育・大学等の枠組における創発システムの接近

■教育に関わるネットワーク形成を目指して

- 一つの科目だけで解決できることではない
＝ 前後の科目との関係など、全体的なアプローチが必要
- FD共同の形成を目指そう → 授業アンケート
や調査結果を共通の言語として、何か新たなもの
の創発を期して、ネットワークの形成を！

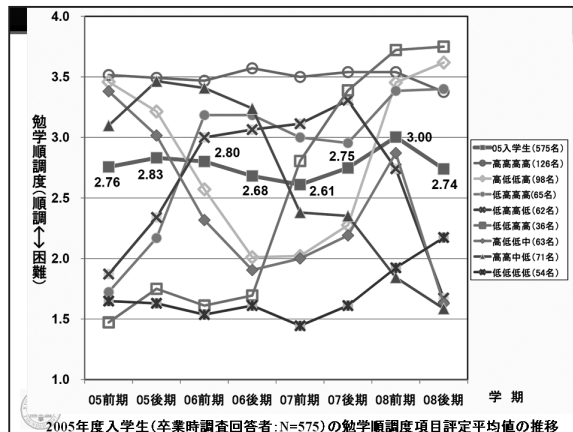
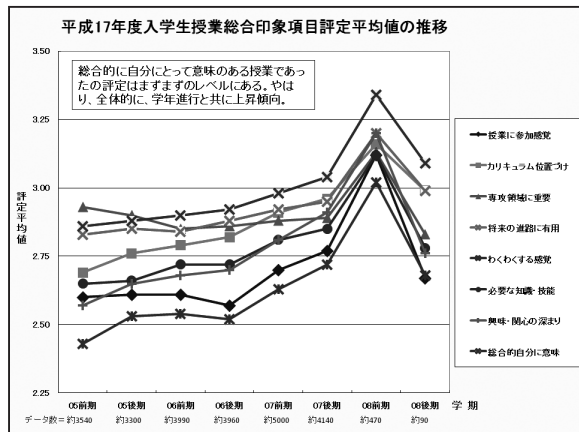
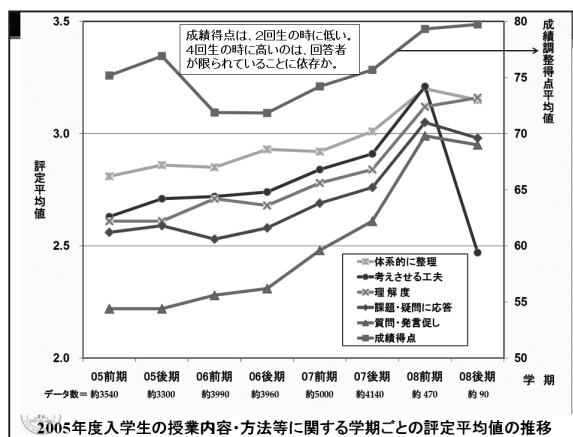
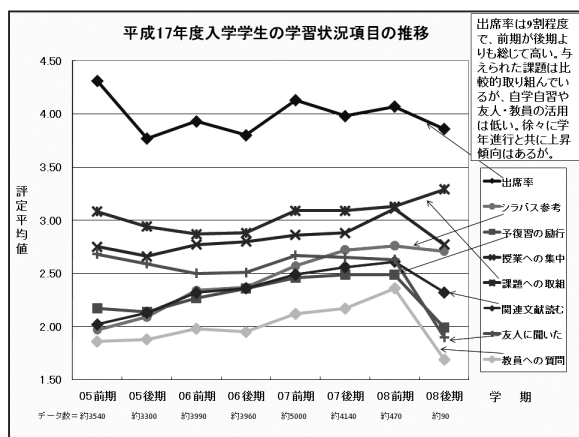
3. 組織としての特徴をどう伝えるか —— 組織の平均値の意味するもの



■工学部授業アンケート調査の設計

➤授業「評価」というよりも「調査」

- ・授業内容・方法に関する評定＋授業全体の印象評定
＋学生自身の学習状況
(学生にとっても自らの学習をふり返る一つの学習機会に位置づける)
- ・「顧客満足度調査」ではなく、授業のあり方を探るための「調査」→ ×「総合的に満足」を○「総合的に自分にとって意味があった」と表現を工夫
- ・個々の授業のローカリティに対応するための「キーワード」の記述＋自由記述(役に立った授業・希望する授業)
- ・成績と照合するために学生番号・氏名の記名式
- ・全授業を対象とするのではなく、H17年度入学生の追跡調査＋H17～20年度入学1回生の定点調査



4. ローカリティをいかに掘むか？

—— 部分集団の特徴を探る



31

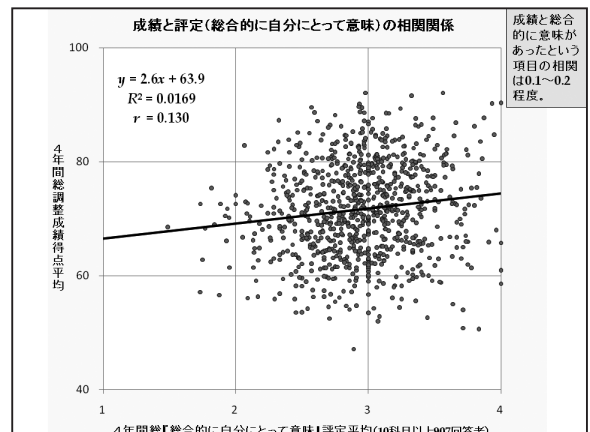
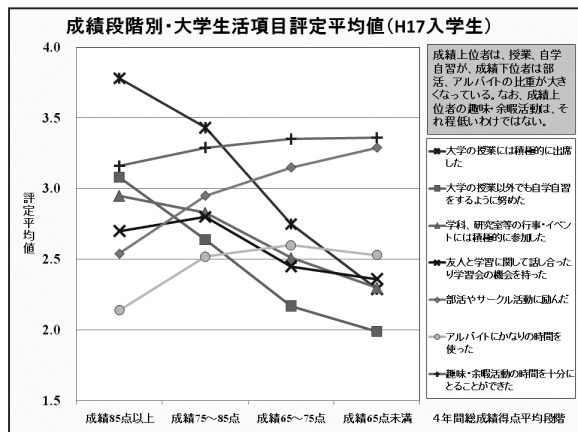
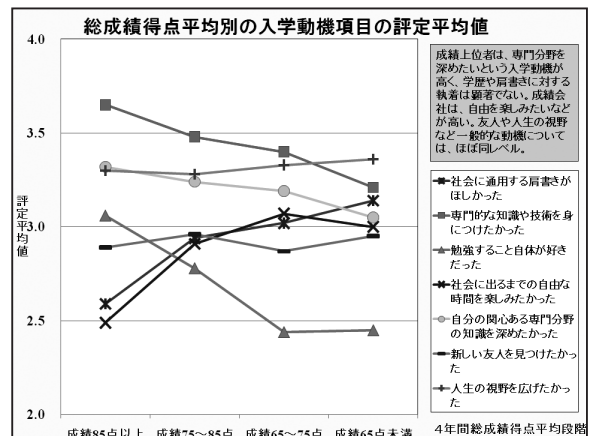
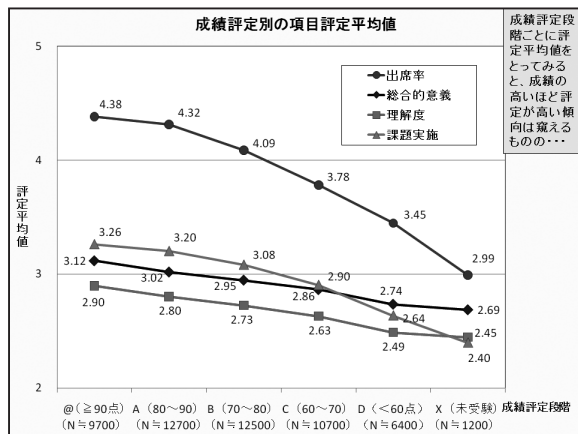
◆成績と評定は弱い正の相関？

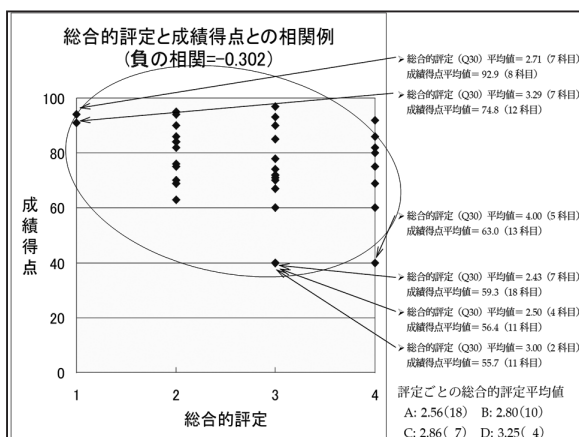
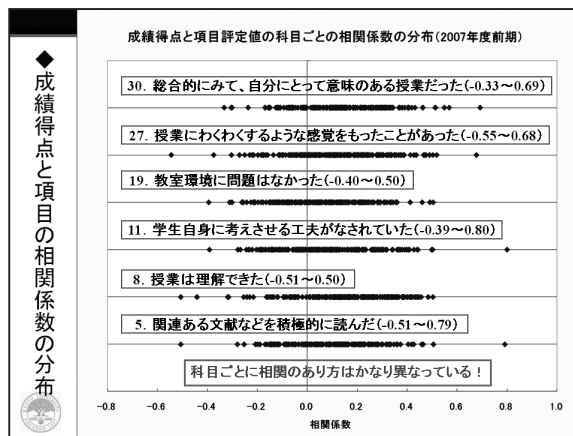
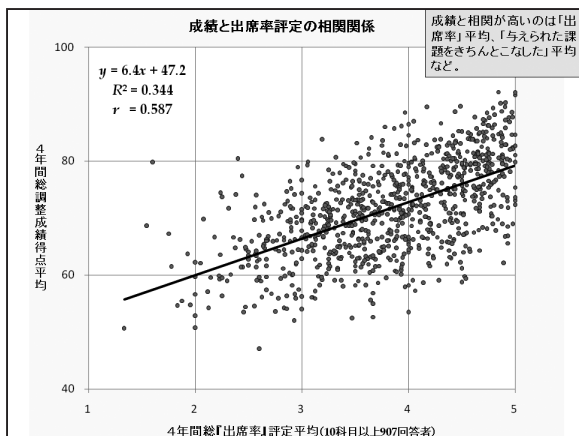
(アンケート回答単位)

➢4年間8学期間の講義科目の全アンケート51,851対の「成績」と「総合的意義」の評定値との相関=0.145

➢成績と相関の高い項目:「出席率」=0.264(N=51,200)、「与えられた課題にきちんと取組」=0.227(N=52,162)

➢総合的意義との相関:「出席率」=0.213、「与えられた課題」=0.346。最大は「関心が深まった」=0.712(N=52,997)、「知識・技能が身につく」=0.708、「将来の進路に役立つ」=0.667など。「理解できた」=0.539、「質問・発言を促す」=0.333。





■平均評定値・相関等の統計指標の解釈上の留意点

➢授業ごとに項目のクラス評定平均や相関係数の意味は異なる！
 → 授業内容・受講学生層・授業方法 etc. に依存 = 科目間の比較は難しい

➢実践の中で評定平均値の意味を自ら把握することが肝要 = 実践的妥当化
 → 授業内で「差」を生み出す工夫を仕掛けて、授業アンケートで確認・検討

◆教育の成果とその評価は永遠の課題

●根拠資料・データの蓄積は必要
 ストーリーの素材づくりは必要

●根拠データ(評価情報)の効率的収集
sampling, tracking, triangulation
 不確定性原理?
 「いちばん大切なことは評価してはならない(板倉聖宣)」
 → ネットワーク形成のためのツールとして利用

継続は力



「携帯電話による授業アンケート」と その結果に関する一考察

大阪成蹊大学現代経営情報学部 准教授 福永 栄一

1. はじめに

「授業アンケート」を紙ベースで行えば、紙資源が浪費し、集計に手間取り、費用がかさむという三つの問題が発生する。パソコンを利用したアンケートはこの問題を解消する手法として有力で、採用する大学も増えているが、回答率の低下という新たな問題も発生している。これらの問題を克服する方法として、本学部では 2008 年度後期から携帯電話で授業アンケートを実施している。2009 年度後期まで三回携帯電話で授業アンケートを実施したが、回答率は低下しなかった。紙の浪費も抑え、集計結果はアンケートの翌日に確認できるようになった。

そこで本稿では、本学部で実施した携帯電話での授業アンケート（本学部ではこれを I-MAS と呼んでいる。）について報告する。先ず、一般的な授業アンケート方法と I-MAS を比較して、それぞれの違いを明らかにする。次に、2008 年度後期から実施した、三回の授業アンケート結果について分析する。さらに、I-MAS の機能面と運用面を確認し、最後に携帯電話での授業アンケートの共同利用について提案する。

2. 授業アンケート方法の比較

授業アンケートの方法は、①紙ベースによる方法（紙に直接手書きするまたは、OMR 用紙に回答するなど）と、②ICT を利用する方法（パソコンや携帯電話に回答する）の二つが一般的である。以下では、この二つと本学部で実施している携帯電話での授業アンケート（I-MAS）の方法を比較して、それぞれの作業量、集計期間などを明らかにする。

2.1. 紙ベースと ICT 利用

紙ベースでの授業アンケートは、多くの作業が必要となる（表 1 参照）。また、集計期間も 2 ヶ月以上必要とし、その費用も膨大になる。大学の規模に比例して、作業量や集計費用・期間が膨大となる。これを解消する方法として登場したのが、ICT（パソコン）を利用した授業アンケートである。しかし、パソコンで実施すると授業中にアンケートに回答できないため、回答率が著しく低下するという新たな問題が生じている。

携帯電話は、文字通り学生が常時携帯しているため、授業中に学生の携帯電話にアンケートの回答をさせることができる。しかし、パソコンを携帯電話に変えただけで回答率低下を防止できるとは限らない。

表1 授業アンケート方法の比較

アンケート方法	アンケートの回答	作業量	集計費用	集計期間	回答率
紙ベース	手作業での記入	多大	多大	2ヵ月	—
ICT利用	パソコン、携帯電話	極少	ゼロ	1日	低下
I-MAS(携帯電話)	携帯電話、パソコン	少	ゼロ	1日	70%

2.2. 本学部の携帯電話での授業アンケート（I-MAS）の概要

本学部で実施している携帯電話での授業アンケート（I-MAS）は、紙ベースの方法と ICT を利用した方法の融合である。学生には1枚だけアンケート文言用紙を配布し、それをアンケート期間中携帯させる。アンケートは授業中に実施する。学生は自分が携帯しているアンケートの文言用紙を見ながら、携帯電話に回答を入力する。

教員は予備のアンケート文言用紙を持っておき、用紙を持っていない学生に配布する。アンケート文言用紙を配布するが、紙資源消費と手間を極力抑えることができる。学生2,000人、1人の学生が5つの授業でアンケートに回答する場合を例にして、紙ベースとI-MASによる授業アンケートの作業内容や作業量等の詳しい比較を表2に示す。

表2 紙ベースでの授業アンケートとI-MASでの授業アンケートの作業比較

作業内容		紙ベース	I-MAS(携帯電話)
用紙準備	枚数	2,000人×5授業=10,000枚	2,000枚+2,000枚
	文言用紙	履修者数を確認し、5%多めに準備 科目ごとに封筒詰め	1教員50枚
	回答用紙	履修者数を確認し、5%多めに準備 科目ごとに封筒詰め	不要
配布と立会い		教員以外の職員が立会うべき	不要
回答用紙の回収		教員以外の職員が回収すべき	不要
用紙不足の対応		急いで取りに行く	不要

表2から、紙ベースで授業アンケートを行えば、多くの紙資源を消費することが分かる。授業に関するアンケートなので、授業を実施する教員がアンケートに立会うべきではないという考え方もあり、その場合は事務職員が授業ごとに用紙を持参し、配布、立会、回収しなければならない。もしそのときに、回答用紙に不足が生じれば、急いで取りに行かなければならない。大学の規模や用紙の枚数に比例して作業量が増大する。

I-MASによる方法はこれらの作業が必要ない。教員に50枚ずつアンケート文言用紙を配布し、授業アンケートの実施をお願いするだけである。学生は回答を携帯電話にするので、教員からは見えない。近くに行き覗き込めば見えるが、教壇の位置にいる限りは、携帯電話の裏側が見えるだけである。従って、事務職員が立会う必要も無い。学生に配布するアンケート文言用紙が足りない場合は、隣の学生に文言を見せてもらいながらアンケートに答えさせる。本学部では複数人が1枚のアンケート文言用紙を見ながら携帯電話に入力している学生達をよく目にする。

3. 本学部の携帯電話での授業アンケート（I-MAS）の結果分析

以下では、2008 年度後期、2009 年度前期、2009 年度後期に本学部で実施した携帯電話での授業アンケート（I-MAS）の結果について検討する。三回の授業アンケート結果の集計を表 3 に示す。表の左側が全アンケートを対象として集計した結果である。アンケートデータを個別に確認すると、必ずしも積極的にアンケートを実施したとは思われないデータもあった。そこで、出席に対する回答率が 30%未満のアンケート（2009 年度前期は 6 授業、後期は 10 授業）を除外して表の右側に集計した。

表 3 携帯電話での授業アンケート三回の概要

		全アンケート対象						出席に対する回答率 30%以上のアンケート対象					
		授業数	回答数	出席数	回答率 注1	自由記述		授業数	回答数	出席数	回答率 注1	自由記述	
						件数	率 注2					件数	率 注2
2008 年度	後期	106	2,121	-	-	254	0.12	-	-	-	-	-	-
2009 年度	前期	118	2,097	3,185	66%	216	0.10	112	2,011	2,852	71%	206	0.10
	後期	111	1,679	2,717	62%	333	0.20	101	1,619	2,345	69%	325	0.20

アンケートは、2008 年度後期は 1 月、2009 年度前期は 6 月、2009 年度後期は 12 月に実施した。2008 年度後期は全授業で出欠確認を実施していないので、出席数等が計算できない。また、2008 年度後期のアンケートは 19 項目で、2009 年度より 5 項目少ない。

注 1：回答率は、回答数÷出席数のこと。 注 2：率は、件数÷回答数のこと。

3.1. 回答率

出席数に対する回答率は、全アンケートを対象とすると 2009 年度前期が 66%、後期が 62% となった。回答率 30%以上のアンケートを対象とすると、それぞれ 71%、69%、表 3 には無いが、出席に対する回答率 50%以上のアンケート（2009 年度前期 96 授業、後期 91 授業）を対象とすると、それぞれ 81%、79%となった。この結果から、本学部の携帯電話での授業アンケート（I-MAS）では、回答率に問題は発生していないと判断している。

3.2. 自由記述

「携帯電話は入力しにくいので、自由記述が減少するのではないか？」と考える人も多い。しかしこの質問を学生にすると「鉛筆で書くより携帯電話で入力する方が簡単だ」という答えが返ってくる。そこで、自由記述の率（自由記述件数÷回答数）を確認した。2008 年度後期は 0.12、2009 年度前期は 0.10 であったが、2009 年度後期は 0.20 となった。1 回答当りの自由記述がほぼ 2 倍になったということである。

また、回答数が多い授業と少ない授業で、自由記述の率にどのような違いがあるかを確

認するために、授業ごとの回答数と自由記述の率を図1のように比較した。（ここでの近似は、傾向を確認するためのものであり、精度や相関の有無・強さなどは検討していない。その点に関する勘違いや、不備などをご容赦頂きたい。）図1から、アンケートの回を重ねるごとに、近似線の傾きがプラスになっていることが分かる。回答数が多い授業ほど1回答当りの自由記述が多くなったということである。これらの結果から、携帯電話での授業アンケートでは自由記述は減少せず、むしろ増加すると考えられないであろうか。

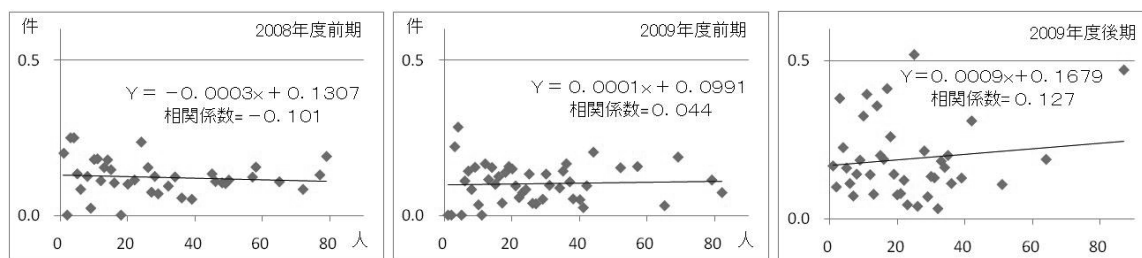


図1 授業ごとの回答数と自由記述の率の関係

4. I-MAS システムの機能と I-MAS システムの運用

携帯電話で授業アンケートを実施すれば、これまでの課題が全て解消され、必ず高いFD効果が得られるとは限らない。そこで、本学部の I-MAS（携帯電話での授業アンケート）の回答率が低下せず、トラブル無く活用できている理由を、I-MAS システムの機能面と運用面から考えてみた。

4.1. I-MAS システムの機能

A) 95%の ICT 化

I-MAS は、アンケート内容を携帯電話に表示しない。そのため、教員が授業でアンケート文言用紙を配布しなければならない。この作業がアンケートへの回答を促進していると思われる。文言用紙が配布されるので回答する、「用紙を持っていない学生はいませんか？」と声をかけられるので用紙をもらって回答する、用紙はもらわないが、友人と一緒に文言を見て回答するのだと思われる。

B) 匿名性

I-MAS は、ユーザーID でログインしてアンケートに回答する。そのため履修者しかアンケートに回答できない。しかし、アンケート回答の直前に授業に共通のユーザーID に変換するので匿名である。だから、携帯電話を使っても心配なくアンケートに答えることができ、自由記述に思ったことが書けるのである。（I-MAS では、授業に共通のユーザーID が分かっても、成りすましによる回答は出来ない仕組みになっている。）

C) 操作性

一般的に、「情報システムの導入には多くの準備期間が必要で、導入にはトラブルが付き物」と考えられている。しかし、I-MAS は、操作性を最優先しているので、このようなことはない。表面がアンケート文言、裏面が操作マニュアルの用紙を配布するだけで、ほとんどの学生は携帯電話でアンケートに答えることができる。携帯電話を持っていなくても、パソコンから回答できるようにしている。

4.2. I-MAS システムの運用

A) I-MAS 委員会による効果の検証

携帯電話での授業アンケートを導入して活用するために、教職員が一体となった新たな委員会である I-MAS 委員会を立ち上げて、6 ヶ月間全授業でテスト使用してその効果を検証した。これにより、正しく使い正しく機能や効果を評価し、効率よく効果的に全教員・全授業に普及することが出来た。

B) FD 委員会での積極的な活用推進

本学部では、FD 委員会を中心に積極的に授業アンケートを推進している。教員に説明し、賛同・実施してもらうようにしている。アンケートを実施し、その結果を分析し、翌週に結果や改善内容を学生に提示することを推進している。

C) 期中のアンケートと結果を踏まえた期中の授業改善

本学部では、2009 年度から授業アンケートを期中に実施している。携帯電話での授業アンケートの最大の特徴である、翌日には集計結果がわかることを活用して、アンケートの翌週に結果を学生に示し、結果に対する教員の考え方や結果を踏まえた授業改善内容（改善しない場合も含む）を説明することに取り組んでいる。

D) 学生の反省材料として利用するアンケート結果

アンケート結果を授業で提示することは、学生の反省材料としても利用できる。学生自身に関する質問に「居眠りや私語あるいは携帯電話で遊ばないで授業を受けていますか」がある。例えば、学生の 3 分の 2 が「そう思う」（＝遊んでいない）、3 分の 1 が「そう思わない」（＝遊んでいる）と回答している場合、集計結果を授業で提示して 3 分の 1 の「そう思わない」（＝遊んでいる）学生（匿名なので特定は出来ない）には反省材料にしてもらう。期中に授業アンケートを行うから、学生にも期中に授業への取組みを改善してもらえる。

E) 年間 4 回の授業アンケート

I-MAS は情報システムなので、何時でも、何回でもアンケートを実施できる。そこで、2009 年度から年間 4 回の授業アンケートに取り組んでいる。前記の期中に通常の授業アンケートを行い、期末に簡易アンケートを行う。後期も同様である。

5. 複数大学での携帯電話での授業アンケートの共同利用

授業アンケートの内容や実施回数、分析内容、公開方法などは大学間でほぼ共通している。大きな違いは無いはずである。そのため、携帯電話での授業アンケートシステムも複数の大学で共同利用できるはずである。各々の大学が、別々に考え、携帯電話での授業アンケートシステムを別々に構築するのでは、費用が重複し、非効率ではなからうか。多くの大学が協力して、共通のシステムを利用することができれば多大なメリットを引出すことができるはずである。そこで以下では、複数の大学が共通の携帯電話での授業アンケートシステムを共同利用する場合の効果を確認する。

5.1. 複数大学での携帯電話での授業アンケートの共同利用の効果

A) 新規利用までの時間短縮

情報システム（携帯電話での授業アンケート）を利用するまでには、機能検討（設

計)、開発、テスト、導入など多数の複雑な工程を確実にクリアしなければならない。そのためには多くの時間が必要である。システムを共同利用すれば、新規で携帯電話での授業アンケートを利用する場合に、これらの時間を大幅に短縮することができる。

B) 導入費用の低減

システムを共同利用すれば、大学ごとにシステムを導入する必要は無い。そのため、新規利用に必要な導入費用が不要になる。

C) ASP、SaaS 方式による費用低減とリスクの大幅軽減

システムを導入せず、ASPやSaaS方式で授業アンケートを実施できるようにすれば、使ったときだけ使用料を払うようにできる。そうすれば、開発費や導入費はもちろんのこと、年間の運用費用やサポート費用なども発生しない。

導入費も含めて固定的な費用が発生しないので、リスクも大幅に軽減される。

D) 経費扱いでの利用

携帯電話での授業アンケートシステムは設備導入扱いとなり、学部単独では決められないこともある。どうしても慎重になり、なかなか使用に踏み切れない。共同で使えるシステムの使用料を紙ベースでのアンケートの集計費以下にすれば、経費扱いで携帯電話での授業アンケートを使うことができる。

E) 利用推進・促進のためのマネジメント技術の共有

携帯電話での授業アンケートシステムは、情報システム（コンピュータ）である。そのためコンピュータ嫌いの人が反対することがある。情報システムの利用推進・促進のポイントは、賛成者を増やし、反対者を中立者もしくは賛成者にすることである。そのためには、携帯電話での授業アンケート利用推進に関するマネジメント技術が必要である。多くの大学で利用し、成功例を積み重ねることで、成功のためのマネジメント技術が確立でき、それを共同利用できるはずである。

F) 分析ソフトの共同利用

アンケートデータが得られても、分析のために表計算ソフトなどで加工するのであれば、その時間がもったいない。グラフ化や経年比較などの分析ソフトもほとんどの大学で共同利用できるはずである。

G) 携帯電話での簡易アンケートやミニッツペーパーなど新機能の共同利用

授業アンケートに加えて、毎回の授業で実施する簡易アンケートや、ミニッツペーパーなどでも携帯電話を活用できる。携帯電話での授業アンケートを共同利用できる体制を構築しておけば、携帯電話を活用した新機能も共同利用できる。

6. おわりに

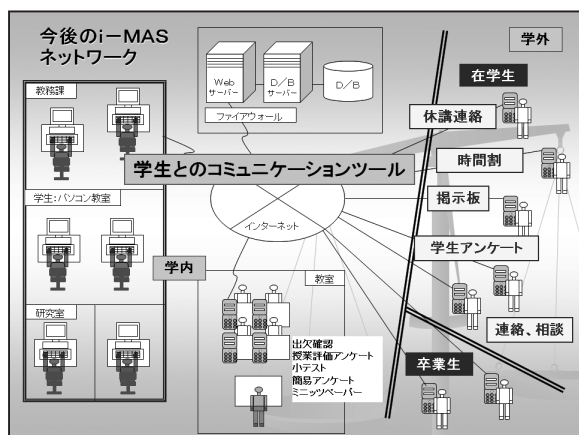
本稿では、本学部で行っている携帯電話での授業アンケート（I-MAS）と一般的な授業アンケート方法を比較したうえで、本学部の携帯電話での授業アンケート結果を分析し、回答率や自由記述が低下していないことを確認した。さらに、I-MAS の機能面と運用面を確認し、最後に携帯電話での授業アンケートの共同利用の効果を確認した。大学間連携として共同利用に取り組み、京都から関西、そして日本の大学全体のFDに貢献できることを願っている。

「携帯電話による授業アンケート」と その結果に関する一考察

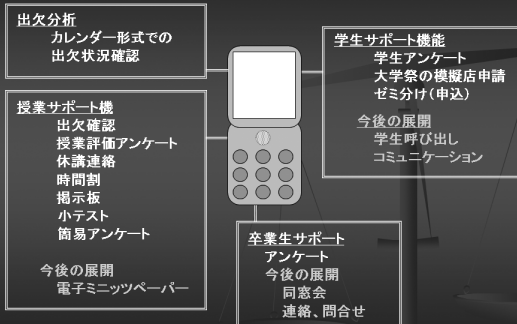
大阪成蹊大学 福永栄一
fukunaga@osaka-seikei.ac.jp

内部IT機能

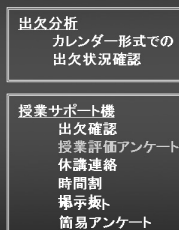
利用推進・促進のための
マネジメント技術
2:6:2を克服する力



I-MASシステムの今後の発展



Saas活用による(システム導入しないで) I-MASの1年ごとの利用



Saas活用による(システム導入しないで) 1回ごとの利用

現状のアンケート費用より安く利用

授業評価アンケート

学生による授業アンケートの活用

山形大学高等教育研究企画センター 教授 小田 隆治

大学コンソーシアム京都
第15回FDフォーラム
第4分科会

学生による授業アンケートの活用

2010年3月7日
山形大学 高等教育研究企画センター
小田隆治

山形大学のFD活動

- 山形大学は6学部からなり、地域分散型である。
- 学部を問わず、一年間、学生は山形市の小白川キャンパスで教養教育を履修する。
- 山形大学の全学共通教育である教養教育の実践的な活動報告を中心とする。

全学共通教育としての 教養教育のFD

担当部局

- 高等教育研究企画センター
- 教育方法等改善専門部会

山形大学のFDの理念

相互研鑽

山形大学の多彩なFD活動

- 学生による授業評価アンケート
- 公開授業&検討会
- ワークショップ
- FD合宿セミナー
- 学生主体型授業の研究と実践
- 授業改善ハンドブック
- FD先進大学調査
- 授業改善報告書
- Web FD

山形大学の主なFD事業の開設年度

- 1999年
 - ・FDワークショップ
- 2000年
 - ・学生による授業評価
 - ・公開授業と検討会
- 2001年
 - ・FD合宿セミナー
 - ・学生主体型授業の研究
- 2004年
 - ・地域ネットワークFD“樹氷”(現代GP)
- 2006年
 - ・エリアキャンパスもがみ(現代GP)
- 2007年度
 - ・個別支援型FDの開始(FD・授業支援クリニック部門の新設)
 - ・ベストティーチャー賞とベストティーチャー新人賞の創設
- 2008年
 - ・FDネットワーク“つばさ”
 - ・学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト(教育GP)
- 2009年
 - ・授業改善ビデオ『あっとおどろく大学授業NG集』

**山形大学のFDは教育改善、
特に授業改善を目指している。**

山形大学のFDの特徴

■公開性

■共有化

**「公開性と共有化」は山形大学の
FDの様々な事業に通底している。**

- FDの理念: 相互研鑽
- 学生による授業評価
- 公開授業と検討会
- FDワークショップ
- FD合宿セミナー
- 地域ネットワークFD“樹氷”
- FDネットワーク“つばさ”

既存の授業の改善

- 授業の診断書
 - ・ 学生による授業改善アンケート
- ↓
- 授業改善のための処方箋
 - ・ 自助努力
 - ・ 公開授業&検討会
 - ・ 授業改善ハンドブック
- ↓
- 授業改善の点検評価
 - ・ 学生による授業改善アンケート

**「学生による授業評価」は、
あくまで教育改善に利用する。**

「学生による授業評価」は、

実施すること以上に
アンケート結果の集計方法と
その公表方法

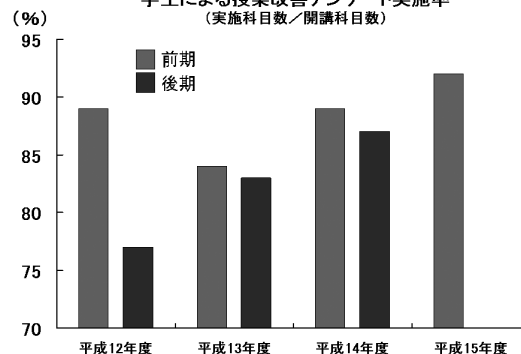
が重要である。

■個の取組と
組織的な取組の併用。

■組織の中での
自分の位置付け。

教養教育 授業改善アンケート集計結果（後期）																			
区分	領域	授業科目	前期		後期		前期		後期		前期		後期		前期		後期		
			実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	実施科目数	
一般教養教育科目	基礎・基幹科目	基礎数学Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎数学Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎物理学Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎物理学Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎化学Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎化学Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎生物学Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎生物学Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎英語Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		基礎英語Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
専門教養教育科目	応用・専門科目	応用数学Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用数学Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用物理学Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用物理学Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用化学Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用化学Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用生物学Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用生物学Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用英語Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		応用英語Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
自由選択科目	自由選択科目	自由選択Ⅰ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅱ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅲ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅳ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅴ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅵ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅶ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅷ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅸ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		自由選択Ⅹ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	合計	合計	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
		実施率	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
		平均値	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
		最大値	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
		最小値	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
		中央値	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
		四分位	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
		四分位	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
		信頼区間	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0

学生による授業改善アンケート実施率
(実施科目数/開講科目数)



■学生による授業改善アンケート

■教員による授業改善アンケート

- 学生のアンケートと同じフォーマット
- 教員による授業改善アンケート
 - 1) 学生アンケートの集計結果を見ての感想
 - 2) 自分の授業の工夫している点

教育情報の
透明化と共有化

実際に、授業をどのようにして改善するか？

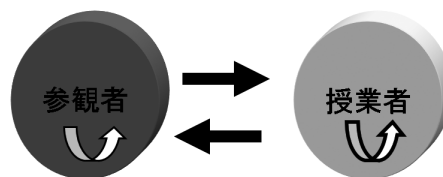
- 自助努力
- ピアレビュー
(公開授業&検討会)

◆ 公開授業と検討会はセットである。



公開授業と検討会において、
授業者をさらし者には
いけない。

「公開授業&検討会」は「授業者&参観者」
双方の授業改善を目的とする



◆ 公開授業&検討会の視点



2000年度後期
常時公開した授業

件数	授業名 授業者名	公開授業 参加者数
1	「英語(R)」 山口常夫	0
2	「可笑しい芸術(芸術)」 元木幸一	0
3	「生命の解釈(生物科学)」 小田隆治	1

◆ 「ミニ公開授業&検討会」

- 公開授業と検討会は授業改善のためにとても有効な方法である。
- 自分の授業を不特定多数に公開し、その検討会を実施することに躊躇している教員が多いのもまた事実である。
- 3～5名の参観者からなる、閉じられた公開性の『ミニ公開授業&検討会』の構想。

「ミニ公開授業&検討会」とは

- 授業を公開する教員は、自分があらかじめ決めた日に、自分の授業を気心の知れた(学部や専門分野は問わない)3～5人の教員に参観してもらい、その後そのメンバーでおよそ30分間の検討会を行なう。
- 検討会の終了後に授業者と参観者にそれぞれA4一枚のアンケートに記入してもらい、それを今後の授業改善の資料に使う。

「ミニ公開授業&検討会」の 授業者と参観者に寄せて

- 1) 内容があり明るいムードの「ミニ公開授業&検討会」にしてください。
- 2) 授業者は普段どおりの授業を心がけてください。
- 3) 参観者もその授業のいいところを発見し、自分の授業にも生かすように心がけてください。
- 4) 参観者は学生と一緒に授業だけに集中しないでください。大事なのは、授業中の学生の反応です。授業の内容や授業者の行動の変化によって学生は敏感に反応しているはずですよ。
- 5) 参観者は、今回参観した授業が15回分の1回だということに留意してください。
- 6) 教室の環境などにも留意してください。
- 7) 検討会では、参観者が授業者を誉めることから始めてください。

「ミニ公開授業&検討会」の アンケート項目

授業者と参観者に共通

- (1)この授業の学生の反応はどうか。
- (2)この授業のよかった点と改善点。
- (3)今回の公開授業&検討会の成果をこれから自分の授業にどのように活かしていこうと考えていますか。

学生アンケートの活用ーその1

課題

- 平成12年度、学生による授業評価の自由記述から教員の一方的な授業に対する批判が強いことが判明した。

対策

- 平成13年から、学生との双方向型(学生参加型、学生主体型)授業の研究
『自分を創るー表現工房の試み(教養セミナー)』の実践と研究

平成20年度教育GP

『学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト』

FDの新段階という位置付け

学生アンケートの活用－その2

課題

■学生による授業評価の自由記述などから、多くの授業に共通するNGが判明した。

対策

■平成15年度に冊子『あっとおどろく授業改善』を作成し、全教員に配布した。

■平成21年度にビデオ版『あっとおどろく大学授業NG集』を作成し、FDに活用している。

学生アンケートの活用－その3

課題

■アンケートの追跡調査から、授業改善に努めているが、思うように進まない教員がいる。

対策

■平成19年から、個別支援型FDプログラムのチャレンジ（高等教育研究企画センターにFD・授業支援クリニック部門の新設）

個別支援型FDプログラム

1) 授業診断
問診票記入、面談、授業参観、「学生による授業改善アンケート」のデータの活用

2) 「個別授業改善プログラム」の策定
A～Fの方法を組み合わせて策定
A. 科目設計の見直し
B. 「ミニ公開授業と検討会」の実施（授業の撮影とその分析を含む）
C. 「ミニ授業改善アンケート」の実施
D. 個別に作成した「ティーチング・チップス」の提示と参考図書を紹介
E. ベスト・ティーチャー級の授業の参観
F. 受講生とのFD懇談会

3) 「個別授業改善プログラム」の実施
2)で策定したプログラムの実施

4) 評価点検
「学生による授業改善アンケート」の実施

5) 見直し
プロジェクトチームと授業者によるカンファレンス

学生アンケートの活用－その4

課題

■授業改善に熱心な教員の顕彰

対策

■平成19年から、「ベストティーチャー賞」と「ベストティーチャー新人賞」の新設

ベストティーチャー賞の趣旨

教養教育において、多くの学生に支持され、質の高い授業を提供してきた優秀な教員に「ベストティーチャー賞」を授与し表彰する。また、近年、本学に採用された新任教員のうち、教養教育において優れた授業を提供している教員に「ベストティーチャー新人賞」を授与し表彰する。

選考方法

1. 賞の選考は改善専門部会が行う。
2. 改善専門部会は、推薦書、授業改善アンケート、履修登録者数、教育方法の工夫・改善、教養教育改善充実特別事業(FD)の参加・貢献等を勘案し、選考を行う。
3. 受賞者の決定にあたっては、応募件数、科目区分、領域を考慮し、3名以内を選出する。

表彰

受賞者には、表彰状及び下記の副賞を贈呈する。
ベストティーチャー賞 30万円 ベストティーチャー新人賞 10万円

その他

ベストティーチャー賞及びベストティーチャー新人賞受賞者には、すばらしい授業の共有化を図るため、平成21年度前・後期の授業で公開授業を実施していただく。

受賞理由:ベストティーチャー賞

地域教育文化学部 ○○○○ 教授

特筆すべきことは、氏が平成20年度前期に学際・総合領域で開講した授業『生活の中の数学(教養セミナー)』が受講生50名のうち45名が回答した「学生による授業改善アンケート」で総合評価が4.93という驚くべき高い評価を得ていることである。氏は、(1)学生のグループ活動、(2)道具作りなどの実践を通じた学び、(3)適切な授業の題材選び、等を通して学生の興味・関心を高める工夫を行っている。こうした氏の熱意と創意工夫が、学生からの高い支持を得ているものと理解できる。また、氏は「FD合宿セミナー」等のFD活動に積極的に参加している。

理学部 ○○○○ 講師

氏が平成18年度から20年度に亘って生命・環境領域で開講してきた授業『地球惑星科学概説(地球環境学C)』は、「学生による授業改善アンケート」で総合評価が4.44という高い評価を得てきた。これは氏が「教養教育ワークショップ」、「FD合宿セミナー」、「ミニ公開授業」等のFD活動の積極的な参加、さらには常日頃から授業科目に関連する本を同僚も驚くほどたくさん読むなど、授業改善の日常的な研鑽の成果であると言える。また、氏は掲示資料をLMSで見られるようにするなど、時間外学習にも十分な配慮を行っている。なお、岩田氏の推薦書には、3名の推薦者が授業を参観して分析した内容が詳しく述べられており、推薦書として秀逸であることを申し添えておく。

学生アンケートの活用ーその5

課題

■学生アンケートにお金や労力がかかる

対策

■大学間連携によりスケールメリットを生かす。そして大学を超えて情報交換をする。

「FDネットワーク“つばさ”」の事業 授業アンケート

- 参加校 8校
- 24万7000枚
- @6.5円

fin.